
ワースト・ファウスト・ストーリー

水のエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワースト・ファウスト・ストーリー

【Nコード】

N2661D

【作者名】

水のエル

【あらすじ】

「最近、夢を見ます。」夢の人”が、誰かと笑い合っていて、それを私はただ見ているだけの、不思議で……でも、優しい夢。私が暮らす現実も、夢みたいになれば良いのに——なんて、本気で言っている訳じゃない。大切な物だって、ちゃんと……沢山、ここにはありますから。でも確かに、私達の暮らす世界は、絶対どこかおかしい——いや、今もどんどんおかしくなっています。おかしくなっていくのが分かるのに、誰も疑いを持ってない。だから、最近はやっとだけ……夢に逃げてしまいたくもなります——その世界に

は、残忍な犯行を重ねる人ならざる生物と、それを狩り続ける謎の「魔神」が居た――

プロローグ：「穏やかな殺意の中で、獣は愛を貪り喰らい……」

薄暗い路地を、一人の男が歩いている――

時刻は既に零時を回っていた。それに加え、近辺に殆ど民家が無いのもあつてか、昼間はそれなりに多かったはずの人氣ひとけは殆どない。そんな場所なのだから、たった一人歩いていれば目立つのも無理はないだろう。他に比べる物が無いのだから、その場所が一番目を引いたつておかしくはない。

だが、それを前提にしても、彼の目立ち方には尋常ならざる物があつた――

男の姿はちつとも闇に溶け込もうとしないのだ。ただ単に、派手な色が闇から浮き上がっている訳ではない。

例えるならば、水と油か。互いに弾き合い、決して混ざり合おうとしない。共にかけ離れた姿をしている訳ではないのに、同じ場所に在れば一目瞭然だ。

「……ここか」

やがて男は、とある高校の前で立ち止まり、一言だけポツリと呟いた。酷く疲れ切った声だ。しわがれている訳でもないのに、何故か年季を感じさせる、磨耗し切った声だった。

彼は成人男性程の高さの校門を易々と乗り越え、躊躇を少しも見せないまま無人であるはずの校舎を目指し歩を進めていく。

まるで、何かに引き寄せられているかのように――

#プロローグ

雲の隙間から僅かに漏れ出ている光が、すっかり活気を失った深夜の教室に射し込んでいる。

教室の壁に設置されている時計が示す時刻は零時過ぎ。常識的に考えれば、夏休みの教室は無人で、警備員だってそう何度も立ち入ったりはしない時間帯。

だが、月明かりはどういう訳か、寄り添いあう二つの人影を床に映し出している。

少年と少女——そのうちの少年の方である志村善紀しむら よしきは自分と、もう一人の少女だけが佇む学び舎で人としての至福に酔う。

幸せだった。

傍らには世界で一番大切な少女が居る。それだけで、この世界で一番の幸せ者だと、胸を張って宣言することが出来た。

彼女の髪は柔らかで、月並みな表現しか知らない自分が評することすら勿体無いくらいに美しい。そして何処か儚さを感じさせる笑顔は優しさに満ちていて——

ただ、隣に居てくれれば、それで良かった。それだけで、何にも勝る安らぎを得ることが出来たのだから。

だというのに、何故だろう。

何故、俺は——命よりも大切だった筈の彼女を『楽に死なせてあげる方法』について、本気で考えているのだろうか。

愛しいはずの彼女を見る度に、いつも思ってしまう。彼女の体を破壊してみたい。殺人というものを、彼女でやってみたい。

一旦それについて考え出すと、中々止まらない。飲み込まれていくのか、のめり込んでいるのか——自分の頭の中で起こっている出来事だというのに、どうしても自分の意志を制御し切れなくなってしまう。

それは、俺が本当にこの少女を殺したがっていると、そういう意味なのだろうか。

そうは思いたくはない。彼女にはずっと隣に居て欲しいと、消えて欲しくないと思っっているはずだから。俺は……俺である志村善樹は、そういう人間であるはずだ。

ならば試してみよう。

彼女の首に手を掛けるんだ。そうすれば、たちまち嫌悪感が沸き上がって歪んだ妄想を打ち払ってくれるに違いない。そして、そして……そのまま——そのまま首を押し折ってしまおうかと思った時だった。

傍らの少女にシャツの裾を引っ張られた時点で、ようやく自分の名が少女に呼ばれていたことに気が付いた。気が付くことが出来た。「志村君……？」

少女は、少し心配そうに尋ねてくる。そうか、分かったのか——俺の異常さを。

本当に心配そうな、献身的な彼女の表情を見て、恐怖せずにはいられなかった。これでは異常者だ。こんな、こんなに本気で心配してくれる子を……俺は、

本当に殺したいと思っている——

「……いや、なんでもねーよ」

心配そうにこちらを覗き込んでくれる少女には、笑顔で答えた。
いつも通りの、本当に嬉しい時にする笑顔——それと全く同じ、偽りの笑顔だった。

しかし、いくら表情を取り繕っても、彼女の心配そうな顔はちつとも変わらない。

「志村君……最近あれだね。変……だね、かなり」

「変かあ？」

「変ですよー。二人きりになりたいとか電話してくるし……それに——」

そりゃそうだ。邪魔が入ったら駄目だろ。いつ本当に殺すかわからないんだから。

「それに……？」

「ご希望通り二人つきりになってみても……この通りです」

「どの通りだっというのかな」

「いや、だって、ほら、結局何もしない——……って、私に言わせるのか」

色々楽しい方向に少女は考えている方だが、違う。少なくとも彼女にとっては違う。

> 殺人くを行おうと——そのつもりがあつたからだ。

でも結局、いつも肝心な所で決心がつかなかった。今日、この日もそうだ。いざ彼女を目の前にとすると、どうしても迷ってしまう。

この少女を惨殺してしまって本当に良いのだろうか、と。

だが——

「もう良いよ……度胸無し」

この尊い命を自らの手で散らしてみたいという異常な欲望は、確かに胸の内に巣食っている。

しかし同時に、俺がこの少女の事を大切に思っていることもまた、真実だ。その思いがあつたからこそ、俺はここまで迷い続けてきた。

「夏休みも終りですねー。何か良い思い出、志村君には出来た？」

「……俺はそれどころじゃなかったな」

その通りだ。君を殺したくて殺したくて、でもそれが出来なくて、それどころじゃなかった。

「塾ばかりだったけ？ 夏休みだつていうのに全然会ってくれなかったよね。電話以外でちゃんと話せたのが今日なのです！ 8月31日——って、もう9月1日か。あつはつはつ……夏休み終わっちゃったねえ」

明るい口調に、明らかな皮肉を乗せて、彼女は一気に捲くし立てくる。

こうなるともう、何を言っても無駄だ。優しそうな顔に似合わず、この少女は中々毒舌だったりする。舌戦ではとても勝てる気がしない。

そんな少女の非力な腕を捻り上げ、俺の力で屈服させる光景は想像するだけで——

「——悪かった。ごめんな」

「べつつに、謝んなくても良いですよー。その代わり……んー、そうだなあ。何して貰おうかな……ふふふ」

俺に対する処罰を、凄く楽しそうに考える少女を見つめながら——俺は、改めて思う。

殺したら消えてしまうのか——

もう>殺人<という行いそのものに対しては、既に恐れという感情を抱いていない。>殺人<という言葉に対して人が抱く嫌悪感——それが著しく欠落していた。そして今、俺は傍らでなにやら思案している少女を、殺したくて……殺したくて、たまらない。

しかし、彼女のことは本当に愛している。欲望のままに彼女を殺

してしまえば、当然ながら彼女とは、もう二度と会えない。

死んだ人間は居なくなってしまう。そのはずだ。当然のことだ。それを承知しながらも、心は常に少女を惨殺することを望んでいる。求めている。

命よりも大切なはずの、最愛の女性を、この手で殺したい。折り曲げたい。解体したい。

「……あの、ちょっと、いいかな……？」

再び欲望に思考を委ねていた時、さつきと同じ様に衣服の端を引っ張られ、彼女が呼んでいる事に気が付く。

ふと、彼女の方に顔を向け——そして、そのまま固まった。

彼女の顔が、触れそうな程の距離まで迫っていたからだ。

「あ、あはは………」

遠慮しがちに寄せられてくる優しげで、それでいて整った顔には緊張が見られる。

「だ……駄目、かな……？」

「……凄く駄目ではない」

なんだろう。体が熱い。この期に及んで恥ずかしがっているのだろうか、俺は。

そう思った瞬間、ちょっとした安堵が一瞬俺を楽しにした。なんだ、まだ人間らしい所が残ってるんじゃないか。初めてでもない癖に、全身が熱い。体の中まで熱いのだ。

しかし、ただの照れにしては熱過ぎる気がした。何かが、体の中で燃えているような感覚だ。胸の奥の何かに火が点き、燃えている。

熱い、熱い、熱い……！

何が燃えているのかは分からなかった。でも確かな事がある。

この炎が勢いを増す度に、この少女を欲する気持ちが高まっているようだ。

こんなに近くに居るんだぞ。ここでみすみす逃してしまうのか――
囁きが聞こえる。

勿体無いことをするな。逃すな。殺せ。そして――

君は誰だ？

「お、俺……俺さ……！」

何か、何かを少女に伝えようと思った。これが、最後になると思ったから。でも何故か、上手く言葉で表せない。

どうした。何故、たった一言……「逃げろ」と言えないんだ。

自分でも、俺が今彼女に何をしようとしているのか、見当がつかない。だから「逃げろ」と言うべきだ。

俺に人間らしさが残っているなら、俺が志村善樹という人間ならば、「逃げろ」と言えるはずなのに……。

喉から言葉が出ない。口が思い通りの言葉を紡げない。

「い、いきなり過ぎたかな……あはは……ごめんね、タイミング分からなくて……」

彼女には、俺が拒絶しているように見えたらしい。慌てて俺から離れようとする。

逃がさない。逃がすな。逃がしてはいけない。

心の声に導かれるがまま、逃れようとする少女を抱き締めた――
捕まえた。

思考は透き通ってゆく。迷いは徐々に消えてゆく。

殺せ。

「殺す」

戸惑い、俺の腕の中で呆然とする少女の、可愛らしい瞳をじっと見つめながら、俺は何かを呟いた。

そして、

「うつ……痛っ!？」

そのまま優しく、締め上げた。

「や——やめ……て……!」

力任せに身体を圧迫していく感触が堪らない。少女の悲鳴が心地よい。

前から、ずっと前から、後悔しか残らないと思い実行出来なかった事が——こんなにも強烈な快楽をもたらしてくれるとは思ひもしなかった。罪悪感はなく沸かない。どんなに腕の力を強めても、強烈な快楽、陶酔感だけが生まれていく。

「俺さ——」

再び、自分の意志で言葉を紡ぐ。先ほどとは違って、口は簡単に動いた。

理由は分かっている。本当に言いたいことが分かったからだ。さっきのは間違いだ。「逃げろ」だなんて、あんなのは間違いでしかない。

「う——しむら……くん……?」

「愛してるよ」

耳元で囁くと同時に、締め付けを強くする。

いつの間にか——

自分が人間離れた腕力を発揮していることに、違和感が全く沸かなかった。それをわざわざ考えるよりも、彼女の身体を折り曲げる方が何よりも魅力的だと思ったからだ。

「い……いや……! や……めて——痛っ!」

このまま折り畳んでしまおうか——四肢を引き千切って分解してみるのも中々面白いかもしれない。

どちらも魅力的だ。どちらか一方を選択するのが惜しいぐらいに。だから、この少女の意見も参考にしようと思った。

「なあ……人の体を、小さく折り畳むのと、少しずつ引き千切っていくのって、どっちが楽しいかな。君の意見が、聞きたい」

「やめて……っ」

少女が何かを口にした。力の無い、掠れた声だった。

聞き取ることは出来た。だが、俺の問い掛けに対する答えにはなっていない。

意味の無い言葉、興味も湧かなかった。だから、少女の言葉は『無かった事』にしておこう。

「なあ、早く答えてくれよ。それとも俺が決めて、良いのか？」

「……嫌。やめて……っ」

少女がまた、何か言った。

俺は——ただ、分らない。意味のない言葉。意味のない疑問。

「……俺が決めて、良いのか？」

もう一度聞いてみた。

苛々していた為か、少し怖がらせてしまったかもしれない。でもそれは我慢の限界なのだから仕方がない。早く最後まで、最後までっ……その為なら——

「嫌……嫌だ……！ 志村くんはっ……こんな……」

まただ、また何か言った。よく意味の分からない言葉だ。どうでもいい、興味が無い。

しかし、全くもって意味が分からないというのに、少女の言葉の一つ一つがやけに胸を突いてくる。

チクチクした。胸の奥の、熱い何かの——その更に奥底にあった何かが僅かに痛む。

この痛みは何だろう。この痛みには、何の意味がある？ それとも、これもまた無意味な出来事？

俺は考えた。頑張っ、考えた。最後になるかもしれない、人間

としての思考を敢行する。

極限まで精神を集中させた。胸の奥で燃え上がった何かを——山積みになった燃えカスを、死に物狂いで掻き篋り……そして見つけた。

優しさがあった。笑顔があった——

でも、もう燃え尽きて、ただの灰になっていて——どれだけ掴もうとしても、ボロボロと指の隙間から零れていく。

怖くなった。今更になって恐ろしくなって、それらを慌てて掻き集める。

頑張った。泣き喚きながら、必死で拾い集めた。そして、

ただの灰しか残らない——

「オ、オオオ、オレはッ……………オレは……………!!」

面倒だ。さつさと済ませよう。

このまま抱き潰してしまうことにした。少女を捕らえた腕に、このまま力を込めるだけで——この、行き場のない欲望を満たすことが出来る。

決断し、行動に移そうとした。躊躇いはしない。躊躇いの原因はもう、燃えてしまった。灰になってしまった。

だから、殺せる。

彼女との思い出も、優しさに満ちたあの笑顔も、今まで俺を支えてくれていたはずの物を全て炎にくべて、俺は——

「誰だああ!？」

だが、俺は手を止め、代わりに叫んだ。憎悪に満ち満ちた、自分でも驚く程の、おどろおどろしい咆哮が教室の空気を震わせる。

何故なら、とても不愉快な気配を——俺と彼女以外の存在を、すぐ近くに感知したからだ。

誰かが、居る。今までの自分からは想像も出来ない程に研ぎ澄まされた感覚が、自分達以外の不快な存在を捉えている。

「邪魔を……邪魔をするのか……？ 誰だ、誰だ、誰……だ？」

さっきまで、あんなにも熱かったはずの胸の内が、一気に冷めていくのが分かる。体の奥底に灯った炎は熱を失い、冷たい炎となって感覚を研ぎ澄まし、鋭敏にしていく。

「気持ち……良かったのになぁ——誰だよ」

静かな怒りを、冷たく燃やしながら、教室に二つ設置された扉の内、近い方へと敵意を向けた。居るのは分かっている。

「お名前を聞いているんだぜ？ この覗き野郎め」

扉の向こう側に存在しているであろう侵入者へと声を掛けた。だが返事はない。何の反応もなかった。

苛々する。早く、早く続きがしたいんだ。出て来い……出て来い……。

「何度も言うが……分かっているんだぞ？ 出てこいよ」

もう一度、既に侵入者の存在に気付いているという事を強調して呼びかけた。

やはり、何も反応は無い。そうか、そのつもりならこちらから……こちらから行ってやろうか。

そう思った刹那、何かが破裂するような音がした。同時に、悠に5メートルは離れていたであろう扉が急激に迫り、それで視界が一杯に——

「ッ——あッ!？」

避ける暇もない。元は扉だったはずの鉄板が、恐ろしい速度で迫り、気付いた時には俺の体を腕の中の少女ごとぶっ叩いていた。

強烈な衝撃に、彼女を抱いていた腕も解け、そのまま俺は床に倒れ込んだ。不思議と痛みは感じない。もしかすると、腕力だけでなく、単純に肉体自体も頑強になっているのかも……しれない。

でも、そんなことはどうでもいい。俺は少女の安否が気になったのと、敵に報復を加える為に、すぐさま立ち上がろうと床に手を着いた。

その時だ——不意に、何者かが俺に後ろから飛びかかるようにいるのが、”頭の中に直接”、映像として映り込んできた。

目の届かない場所の映像がどうして？ 原理は分からない、だがこの際どうでもいい。

こいつだ。こいつが、俺の楽しみを奪い、俺の……俺の命よりも大切な少女に向かって危害を加えた者に違いない。殺そう……殺してしまおう！ 殺す……！！

侵入者は、俺が奇襲に気付かぬままで見たらしく、その背後を目掛けて駆け出した。恐らく、更なる追い討ちを掛ける為に。

鉄扉の直撃に俺が耐え切ったと、そう悟った瞬間から即行動に移した侵入者の判断は迅速且つ的確——そのはずなのに、今の俺には何故か、侵入者の動きそのものが酷く緩慢に思えた。

ならば、わざわざ防御に徹する必要もない、そう考えた。見えているのなら、加えて俺に『力』が生まれたとなれば、十分に侵入者に対応出来る——その自信があった。

「ははは！ 後ろのお！」

右手と——その五本の指に力を込める。

ただ『攻撃』をしよう、そう思った。それだけで、侵入者を八つ裂きにするには何をすれば良いのか、瞬時に理解することが出来た。

そして指自体が徐々に”硬化”していくのを感じ、それが『武器』として機能することに確信を持つ。

「見えて、いるんだよ！」

振り返りざまに、今や文字通りの凶器と化した手刀を、横に凧いだ。

刃物なんて、一度も振り回したことがない。だというのに、手刀を振るう感覚は——とても心地よいものだ、何故かそう感じる。手刀が空気を裂いていく感覚は気持ちがいい。更に、それが獲物を解体していく光景と、その感触がもたらすであろう快楽を想像するだけで、堪らない。

そして、怒りと欲求に身を震わせながら放った一撃は、確実に標的と接触し——

「あ……れ……?」

しかし、腕を最後まで振り被ったというのに、求めていた感触はやってこない。確かに、当たったはずなのに、手応えがまるでない。それもその筈だ。手が、右手が無くなっていたのだから。

「あ……あつ……血がつ……!?!」

現状を上手く飲み込めなかった。手首から先が——無い。腕を切られた? 斬られたというのか……?

傷口は壊れた蛇口のように真っ赤な液体を吐き出し続け、収まる様子もない。

「あ……あああ!」

今まで感じていた陶酔感、獲物を狩る悦びなど一瞬にして霧散してしまった。痛みを通り越した熱さだけが、手首の切断面をじんわりと走っている。

そうやって、ようやく気付く——俺の方が、狩られている!

「嫌だ……嘘だ……嘘、だ……」

そうして傷口を抑え、悶えている間にも、侵入者は確かな殺意を持ちながら、こちらへと歩を進めてくる。

嫌だ、死ぬのは嫌だ。

「あ……! やめつ——」

静止の言葉を言う暇もなく、顔面に強い衝撃を受け、傷口を抱えたまま冷たい床に倒れ込んだ。殴られたのだ。こいつに——侵入者に殴られた。

殺される。このままでは殺される。殺される!?

「や、やめっ、やめて下さい！ こっ、殺さないで！」

さっきまでそいつに抱いていた怒りも優越感も、全てをかなぐり捨てて命を乞った。

こんなところで死にたくない。まだ17年間しか生きていない。

まだやり残している事が、沢山残ってる。それに――

「な、何なんだ……？ どうして俺が殺っ――ぐっ……！？」

どうして俺を殺すのか――そう言いかけた瞬間、先程よりも更に強く、侵入者の拳が顔面を捉えた。口内が裂け、白い固形物が混じった血液を大量に吐き出す。凄まじく、痛い。

意識が、視界が薄れていくのが分かる。そして、想像を絶する痛みと恐ろしさの中、誰かの荒い息遣いだけが聞こえていた。

『ハア――……ハア……それも、それさえも分からないのか！』

侵入者が初めて声を出す。男の声だった。薄れゆく意識の中で、初めてそいつの声を聞いた。

妙な声だ。機械で加工したかの様な、不自然な声。そして何故か、息遣いがとても荒かった。

『――……なら……』

男が、右腕を挙げた。人間の腕ではない――気味の悪い腕だった。

恐ろしい腕だ。奇怪で、恐ろしい、凶器でしかなく、形容し難い^{がた}

――化け物の腕だ。

いや、腕だけでは、ない――

侵入者の素顔なんて、暗くて今まで見えていなかったし、興味も湧かなかった。こうなるまでは、単なる獲物だと思ってたから、殺した後で好きなだけ眺めれば良いと思っていた。

だが、今初めて、月明かりにより露わとなった『そいつ』の姿は、とても直視出来るような姿ではなかった。

意識して見ようとした訳ではない。無意識に顔を少し上に向けた
だけだった。でも、俺は見た。見てしまった。

「ッ……！？」

正しく『それ』は、死への恐怖を瞬間的に忘れさせる程の、恐ろ
しく——嫌悪さえ抱く程の異形だった。

「う、あ……！！！」

『一瞬で……済ませて、やる』

痛みと恐ろしさの為、逃げる事すら出来ない俺に——そいつは人
間の物とは全く違う形をした口を、全く動かさずに死を宣告した。
この奇怪な化け物は、言葉を発するのに口を動かす必要がないら
しい。

「こ、殺すのか……やめてくれ、何でもするから、だから……」

俺は痙攣した唇を必死に動かし、ひたすら命を乞う。

『ハア——……生き永らえたって、それは……違う。あんたじゃな
い……だから——』

俺は、既に身動きすら出来なくなっていた。

そして思った。この男にしてみれば俺なんか、そこら辺の羽虫と
大して違いのない、矮小な存在に過ぎないのでは——

最初は、自分と同類”程度”だと思っていた。でも、こんなのは
違う。こいつは——

『だから死んでくれ——いや……死ね……！』

男の右腕は俺の急所を素早く、且つ的確に穿った。

「ッ……！！？ あ——ッ」

刃物が針か、それとももっと歪な物なのか——男の腕から伸びた
鋭い何かが胸に突き刺さっている。

不思議と痛みはなかった。ただ、異様に冷たい。氷水が、胸に突
き刺さったモノを通して身体の中に無理矢理注がれているような心
地だ。動けない、動かない、体が動かない。

「い、いや……だっ！ 死にた、ぐっ……！！ 俺は、俺はあの子

を……！」

そして終りは、もうすぐやってくるだろう。それがリアルに感じ取れた。

怖いよ、水葉――

何秒経っただろうか――冷たさが身体全体に行き渡り、感覚が全て押し流された頃にはもう、男の姿は視界から消えていた。身体には何一つ感覚が無く、身動き一つ出来やしない。意識も、軽く息を吹きかけるだけで一瞬にして消えてしまいそうな程に弱々しい。

ここでちよつと考え事をしようと思った。

普通の人間なら『死を目前にして何を呑気な』と思うだろうけれど。でも、どうせ数分。もしかしたら数十秒かもしれないが、多分その程度の命だ。有意義に使うと思った。

議題は――『何故、俺は殺されたのか』について。

思い当たる節があったらどんどん挙げよう――いや、一つしかないじゃないか。

俺は、殺しをやるうとした。彼女を、水葉を殺そうとした。この手で、折り曲げたり、解体しようとした。だというのに、この瞬間までそれが『いけない事』だという事の自覚が全く無かった。

（そうか……殺そうとしたから……殺されたんだな）

なら、当然だ。殺したもんな。殺人、犯罪だぜ。しかも相手は恋人だ。最悪だ。俺は、最低の屑野郎だ。

納得がいった。人を殺すような奴は、殺されて当然なんだと――そんな、至極当然のルールさえ俺は忘れていたのだ。

ああ、やっぱり死んで当然だな。

でも、やっぱりあの子のことだけが、気になって仕方がない――

瀬川水葉せがわ みずは——

いつか、守ってやる……とか、そのようなことを彼女に言ったっけか。それが、これだよ。

（ごめんね……）

ごめん、殺そうとした。ごめん、守れなかった。ごめん、もう一緒に居ることも出来ない——

あの子はああ見えて、弱い。俺が支えてやらなきゃいけなかったというのに。それを、俺は……。

しかし、そうか——あの化け物は、俺の代わり……かどうかは分からないけれど、彼女を守ってくれたのかもしれない——もしかしたら、これから先も——

これから先も、彼女の隣に居座り続けるのだろうか。俺の居ない、彼女の隣に——

「駄目だ」

突如、何の前触れもなく、再び目が開いた。意識が徐々に覚醒していく。死ぬと確信していただけに、拍子抜けだ。

でも、生きていることが堪らなく嬉しい。

そして、いち早く自由が利くようになった眼球をギョロギョロと回し周囲の状況を見渡す。必死だった、水葉の安否が気になっていたからだ。

「あ……！」

居た、彼女だ。愛しい愛しい彼女の姿。でも——

「あ……ああ……！！」

傍らに、彼女の身体に気安く触れる化け物が居るじゃないか。

「は——ははっ……！！」

はっはっは……それは、駄目だよ。汚すつもりか。俺の、俺のモノだぞ。俺の、俺の、俺のお——

慌ててはいけない——化け物は油断している。音をたててはいけない——化け物が振り向いてしまう。息の根は、一瞬で止めてやるんだ。後ろから近付いて、這い寄って、突き刺して、突き刺して、突き刺して、突き刺す！！

（ははは……ははは……！！）

一歩動く度に「べちゃべちゃ」と音がするのが気になったが、標的は全く気付いていない。

（そんなにも、彼女に夢中になって——どういつつもりだ。どういつ見だ。殺してやる、殺してやる、殺してやるぞ）

前足は最早人間の物では無かったが、関係ない。背中からは気味の悪い突起物がせり上がり始めているが——どうでもいい！

先ほど切り取られたはずの腕は、いつの間にか更に凶器らしいモノとして復元されている。俺は、それで獲物を八つ裂きにしようと、そう決めた。

『今度は……お前が死ぬ……！！』

四本の足をバネにして、俺は侵入者の化け物に飛び掛った。

興奮を抑えきれずに喉から発した雄叫びが、目の前の標的と同じように、機械で加工されたかのような声になっていたことに、気付きもせずに。

憎き侵入者の、その無防備な背中を捉えたと思った。ざまあ見る。ざまあ見る！——

生々しい音、そして感触。次の瞬間には、凶器と化した俺の右腕が、瀬川水葉の腹部を抉っていた。噴出す鮮血が、既に原型を止めていない俺の全身を、紅く染めていく。

『……水葉？』

力なく倒れる彼女を眺めながら、俺はただひたすら——

ひたすら——？

俺は……ひたすら……——何を？

その先が全く思い出せない。結局俺たちは、侵入者はどうなったのか。

だが、ただ一つだけはつきりしていることがある。

俺は、生きている——あの夏休み最後の日から、1年が経った今この瞬間にも人としての暮らしを捨て、生きている。その事実だけが、あの奇怪な夜と現在とを唯一繋ぐ事柄なのだ。

そうだ、あれから一年経った。一年……経ったんだな。

生きている、志村善紀は生きている。

そして、腹をたっぷり抉られたはずの——瀬川水葉もまた……。

生きて——

プロローグ：「穏やかな殺意の中で、獣は愛を貪り喰らい……」（後書き）

まずは唐突かつ謎めいた展開を心がけた……”つもり”です（自信無いなあ、おい

今回のエピソードで重要なのは心理描写だと思い、プロローグに限り一人称視点で書いてみました。活かせるかどうかは怪しいですが（汗

つたない文章力ですが、お付き合い頂けると嬉しいです。

感想、誤字脱字の指摘、アドバイスなどお待ちしております。

第1話(1)：トラックは走る

不思議な夢を見ます――

いつも同じ夢を見るとか、そういうものではありません。もっと不思議で、ちよつと面白い……そんな夢を見るんです。

あたし、その夢の中では誰か知らない人の”視点”に立っているんですよ。

その知らない誰かさんが見ている物と、同じ物を見て、聞いている音と同じ音を聞いて……まあ、それだけなんですけどね。でも、それだけなのに、ちよつとした映画を見ているみたいでとても面白いんですよ。

その夢の人はどんな人かって？　んー……それが分からないんですよね。”視点”に立ってるだけですから。自分の顔、直接は見えないでしょう。それと同じです。

でも、多分良い人だと思いますよ。

だって、その夢の限りでは、家族や友人……他の人間達と、凄く仲が良さそうなんですもの。友達がいっぱい居て、馬鹿なこと笑い合ったり、有り触れたことを純粹に楽しんでいて……とても幸せそう。

だから、良い人だと思います。他人と心から笑い合える人間に悪い奴は居ないと……そう、父も言っていましたしね。

でも、その夢を見た後にはどうしても悲しい気持ちになるんです。明るい夢なのに……賑やかな笑い声で満ちた、楽しい夢なのに……。あの夢が醒めそうになった途端に、“夢の人”が凄く悲しむんです。そしてそれが、直接伝わってきて……急に、胸が締め付けられるような――

え？　いつからって……ああ、夢を見始めたことですか。それが全然覚えてなくて……でも、カウンセリングが始まるより以前なのは確かです。いや、先生つてば、こんなお馬鹿な話聞いてくれるような人にはとても見えなかったの……。中々話すつもりになれなかったんですよ。あ、今は違いますよ？　先生は真面目そうな癖に、実はとんつっでもなく、不真面目で意地悪で変人な面白い人だって分かりましたから。ふふ、ようするに良い人――って意味ですよ。

って、もうこんな時間！　そろそろ行かないと――ええ、そうです。孝司さんこしじにお呼ばれしてまして……。

はい、『S・RDP』の件で――あはは、心配してくれるんですか？　大丈夫ですよ。ちょっと疲れますけど、身体に影響は無いみたいですし……それに、彼にはお世話になってますからね。迷惑かけてる身としては、たまには役に立ちたいんですよ。

では、また来ますね。麻霧先生あさぎり。次来る時には、何か美味しいお菓子でも持っていきますから、また下らないお話に付き合って下さいね。

#第1話

血の気が瞬く間に失せていく――

耳鳴りが聴覚を鈍らせ――

体は萎縮し――

頭の中では警鐘が鳴り響いている――

瀬川水葉は動けなかった。

トラックが迫ってきている――

確実な死が、確実に近付いている――

だというのに、水葉は一匹の猫を抱えたまま、道路のど真ん中でその身を固めていた。動こうとしても、身体がどうしても反応してくれない。今動けば、まだ間に合うかもしれないのに、全身が萎縮してしまつて、走り出すことさえも出来ないでいた。

情けない。さつと猫を抱えて、そのまま走り去るだけのこと……それだけのことだと思つたのに。

いざ行動に移してみればどうだろう。トラックのクラクションと迫り来る巨影に震え上がり、こうして子猫と共に最後の瞬間を迎えようとしているではないか。

周囲には誰も居なかった。元々車どころか通行人の通りも少ない道だ。それに、例え今から誰かが駆け出したとしても間に合わないだろう。息を一つ吸う間にもトラックとの距離は4メートル、3メ

―トルと縮まっっていく。

死を目前にしたパニックの中、水葉は子猫を庇うように抱え込み……そして後悔した。

そんな暇があったら子猫だけでも、どこか安全な場所に放り出すべきだったのに。何故それが、その程度のことが出来なかった!?

(間に……合わない!?)

せめて、子猫だけでも助けるべきだった。なのに、脚どころか腕……指一本さえも動かないとは情けない。余りにも情けない。

(誰か……!)

自分で飛び出しておいて、結局誰かの助けをアテにする自分に失望しながら、水葉は目蓋をきつく結んだ。

そして、次の瞬間には強烈な衝撃が水葉を襲い、小柄な体躯は為す術も無く――”横へ”吹っ飛んだ。

(……!?)

少女の体は、トラックの進行上ではなく、横へ――つまり、歩道の方へと弾かれたのだ。

衝撃と自分が弾かれる速度とで、脳が、視界が、上下左右あらゆる方向へ揺さぶられた。それでも水葉は、自分を助けた衝撃の正体を見極めようと、首を無理矢理に路上へ向けようとするが、

「ア――ッゲ、ウ……!!」

首が曲がるよりも、身体が硬いアスファルトの地面に叩きつけられる方が、早かった。頭を打ち付けることはなかったものの、背中を通して伝わる衝撃と痛みが肺、その他内臓を圧迫する。身体を丸めて悶えるのが精一杯だ。空気を取り込むことさえままならない。

「ゲホッ――ゲホッ――っ……でも、生きて……る……?」

「お、おい、怪我は無いか?」

苦しさに悶えていると、突然誰かに声をかけられた。

「ゲホッ……! あ……はい、ちよつと、苦し――」

その声が聞こえてきた方向に視線を移し――なんとか取り込んだ空気を、思わず呑んだ。何故なら余りにも、その声の主が、奇特な

外見をしていたからだ。

そこに居たのはやや長身の男。男性にしては若干長めの黒髪、風に靡く黒いマフラー、黒いコート。因みに、今日は夏休み最後の9月1日。まだ、夏の暑さは残っているというのに、こんな季節に……マフラーに、コートだ。見ているだけで暑苦しくなるような重装備である。

そして自転車。籠のついた、銀色の……オーソドックスな種類の自転車——いわゆるママチャリ——に、『そんな男』が跨っているのだ。少なくとも、普通ではなかった。

しかし、水葉にとって何より印象的だったのは、彼の表情——笑顔、だ。それはもう、飛びっきりの、輝かしい笑顔だった。凄く、物凄く嬉しそうな笑みを浮かべながら、自転車に跨り、手を差し伸べてくれている。

（何故……？ 何故、マフラーにコート？ 何故、ママチャリ？
何故、笑顔……？）

異彩を放ち、それをちつとも隠そうとしない彼は、水葉を『体当たり』で車線上から弾き飛ばした後、タイヤを擦り減らす音を響かせながら、その場——つまり”車道”のど真ん中に、しっかりと車を止めていた……のだろう、恐らくは。そして、そんな荒業を披露してすぐだというのに、男は曇りのない笑顔で——

「ふむ、酷い怪我は無さそうだね……なに、お礼は要らないよ。当然のことをしたまデベブアガシユアツツ——ア、エア、ーッ！
……」

曇りの無い笑顔で——トラックに轢かれた。

車道で止まったのが拙かった。男は何かを早口で喋ろうとしたが、言い切れずに、そのままトラックの直撃を受け、水葉の視界からフ

エードアウトしていった。バラバラに砕け散った自転車の、そのパーツの一部だけが、その場に残る。

男が水葉を歩道に押し出してから轢かれるまで——その間、僅か2秒。

水葉は、動悸の止まらない胸を抑えながら、その場にへたり込む。すぐには動けなかった。一分にも満たない時間の中で、余りにも多くの事が起こり過ぎた。事態が上手く飲み込めない。

「あ、あたし……子猫助けようとして、動けなくなって、轢かれ——轢かれそうに、なって……？　それで、それでボーンと……ボーンと自転車にぶつかられて……！？　それで、それで、あの人に……自転車の人に、助けられて——」

そうだ。そして、代わりに、
「轢かれ——……いけない！」

水葉は慌てて周囲を見回す。すると、トラックと衝突した場所から、10メートル近く離れた位置に、うつ伏せの状態で倒れている“彼”の姿があった。周囲には、彼の乗っていた自転車が無惨な残骸となつて散乱していた。

血は、出ていないように見える。が、あれだけの速度のトラックにぶつかられては並の人間ではとても生きていられまい。生存していたとしても……。

「駄目」

このままでは、時間の問題だ。ここから病院へは遠い。麻霧先生は、医者なのに医者じゃない。頼る事が出来ない。

「私なんかの為に、死なせちゃ駄目だ……！」

彼を救う為、思考を止めることなく水葉は、倒れている男に駆け寄っていった。

（死んでも、助けなきゃ）

人を死なせてまで、生きる価値は無い。そう思ったから……ずっと、そう思っていたから。

（だから、助けなきゃ）

だから、死なせる訳にはいかなかった。何としても、助けなければならなかった。

子猫は、いつの間にか姿を消してしまっていた。

そしてトラックも、特にスピードを緩めることもなく、何処かへ走り去ってしまったていた。

#

反応直結型、人型機動戦闘システム——通称『RDP』。

今や、最強の地上戦力と名高いこの『RDP』は、全長2〜3メートル程の”腕と脚が生えた戦車”を”着る”ようにして運用される、一種のパワードスーツとも言える機動兵器である。

『RDP』の機動力や火力、装甲は戦車に劣る。コストパフォーマンスも、決して良いとは言えない。

しかし、追求された小型化により、機種によっては屋内での作戦行動が可能。更に、手軽に改造出来ることで、あらゆる環境下での作戦行動に対応出来る汎用性を持っている。そして、歩兵クラスでは運用出来ない重火器を、機動力のある程度確保したまま、単独で運用出来るという他の陸戦兵器にはない利点を持っている。

他にも、この『RDP』ならではの専用武装が多数開発されており——そういった要素が、現在『RDP』を最強の地上戦力と言わしめているのだ。

平地で足を止めての撃ち合いならば、『RDP』はとても戦車等には敵わないだろう。だが、先に述べた『RDP』ならではの利点

を100%活かせば、向かう所に敵はいない。

開発から数十年経った現在……外見上、SF映画やロボットアニメぐらいにしか居場所が無さそうなこの兵器は凄まじい速度で発達し、様々な派生物を生み出していった。

最近では、作業用として民間で運用される物さえも現れ始め、日常に着々と浸透し始めているぐらいだ。

そういう訳で、今でも研究や開発は盛んである。日々新たなアイデアが生み出され、幾つもの努力が実らずに消える。そして、ほんの一握りの技術が採用され、それすらも踏み台にして全く別の発想が生まれ……それが無限に繰り返されていく。

技術競争は、果てしなく過酷である。

そして、ここ——日本にも、『RDP』開発に夢と情熱をひたすらに注ぎ、それがいつの日か報われることを信じ、日夜戦い抜く技術者達が居た。

「……遅い」

もう丸二日は齧り付いたであろうデスクに突っ伏しながら、小宅孝司は呟いた。おやけ

眼鏡の下にある疲れきった目には、深いクマが浮かび、普段は俗に言う「オタクっぱさ」を感じさせないように整えられている頭髮も、連日の作業により休みが全く取れなかったせいか、清潔感を失っていた。作業に取り掛かるまではビシッと決まっていたはずの制服も、心無しか随分とくたびれて見える。

まあ……しかし、どれもこれも今日までの話だ。今日の『稼動試験』が終われば、取り合えずは楽が出来る。新たな人員の派遣もされるだろうし、今まで自分一人でやってきたような雑務はそいつら

にやらせてしまえばいい。そうだ、そのつもりだった。

「遅いなあ」

しかし、試験に”必要不可欠”な人間がまだ到着していない。ちょうど今、予定していた時刻を15分過ぎたところだ。実際の試験開始時間までには大分時間はあるのだが……。

「本当に良かった。早過ぎるぐらいにしろといて、本当に良かった」だが、それでも孝司は不安だった。

”あの少女”のマイペースぶりを甘く見てはいけない。実際に、既に携帯電話が繋がらない。メールの返信も来ない。早くも、永遠に来ない気までしてきた。

試験の延期は申し立てれば出来ないこともないが、様々なリスクがある。それに、孝司は絶対に今日で終わらせたかった。これ以上続けば、過労で死んでしまう。

軽く絶望し始めた時だ。背後の自動扉が軽い音を立てて開き、そこから”仕事仲間”が決して広くはない職場へ踊り込んできた。

「どーしたあ？ まさかとは思うケドさあー。……延期ですかね！？」

「……………」

孝司は思った——来やがった、と。

「ダンマリー？ ……うはは、図星ですかね！ その対応は……！」

くくくつ……！！ お偉いさん方のご機嫌取りが大変になるなア。

え？ おい」

突然どこからともなく沸いて出た男は嫌味を一気に言い終えると、孝司の隣の席にどかりと腰を落とした。

朗らかながら、見ていて全く良い気分にならない笑顔を浮かべながら、自分の席でもないのに堂々とふんぞりかえっている。

「……ペラペラペラペラと、よくもそんなに口が回るな。見た目通りの無能者じゃなくて良かったよ。お喋りだけは僕より上手そうだし」孝司は冷ややかに言い返す。ただでさえ、仕事続きで苛立っていたせいか、咄嗟に出た言葉は意識せずとも攻撃的なものとなってい

た。

変な理由で延期にすると、必ずこういう輩が「欠陥機」だと、ボロクソに叩き出すのが非常に面白くない。

まあ、この男だけならまだ良いとしても、試験を視察する奴ら……いわゆる”御偉いさん方”にまで言われ、それが評価に影響するのは非常に困る。

それがリスクの一つ。後者だけは、何としても避けたかった。

そして、その『稼動試験』の対象である『次世代RDP』の搭乗員が、この男……かすみともや香住智哉だ。

ロング、茶髪、人懐っこそうで豊かな表情、軽い性格——正に優男の典型のような外見だ。孝司の嫌いなタイプでもある。

しかし、彼がテストパイロットとしてこの場所に居るのは、彼が優秀な技術を持ち、最高の成績を残していたからに他ならない。それは孝司も認めていた。認めざるを得ない——

「お前の口もさ、思ったより達者じゃないの。オタクつてのはまともにも会話も出来ないもんだと思ってたが、あれか、アニメで学んだか？ モニターに話し掛けて練習したか？ ん？」

それでも、認めたくはないのだが。

「……で、どうした、それだけを言いに来た訳じゃないよな？」

「まあ、アレですよ、予定時刻過ぎても『RDP』が運ばれて来ないので、心配で不安で、そして不満でここに来たのですが？ テストもしねえのかい？」

香住はヘラヘラと、笑いを含んだ表情のまま言う。それに、どこか癪に障る喋り方だ。

馬鹿にされている——孝司はそう感じた。

半年程前、初めて彼と顔合わせした時は、性格の軽さこそ気になったものの、それでも、ここまで不快感を煽るような態度を取る男ではなかったはずなのに。

「まだ、『あの娘』が到着していない。あいつが居なきや例のシステムも使えんしな。だからもう少し……——くそつ、麻霧の奴！もう随分前にこっちに向かったんじゃないのか！？<スペリオル>のことは知ってるだろうに……」

「何が<スペリオル>だ」

香住が言った。ふざけた口調は成りを潜め、淡々とした言葉。僅かに落胆を感じさせる、暗い呟きだった。

「何が『優れている』だ。女のガキ一人居ないだけで、標準値のスペックも出せなかった次世代機なんて……そんなモノは……」

「——貴様」

孝司は智也を睨みつける。だが、二人の視線が交わることはない。智也の目は、次世代『RDP』<スペリオル>のスペックが映し出されたパソコンのモニタへ向かっていたからだ。

「——僕は、今から彼女を迎えに行く。お前は搭乗準備を急げ。機体は間もなく搬送される」

何を言えば良いのか分からなかった。どうすれば彼が納得するのか、分からない。

だから命令した。それしか対処の仕方が分からない。どう接すれば良いのか、分からない。誤魔化す——遠ざける——今までと同じだった。

「了解、”お人形遊び”の準備だな」

だが、そうまで言われれば、聞き捨てることは出来なかった。

「……何度かテストをやってきたはずが、まだ自覚出来ていないよ。うだな、”少尉”。——貴様が乗るんだぞ？」

開発者として、そのシステムを搭載した者として、黙っていられるはずがない。怒って当然。殴っても良いはず。……なのに、どうしてか、体はちっとも動こうとはしない。

彼の気持ち、少しだけ、分かってしまう——だから、動けない。中途半端な理解は、単なるもどかしさを生むだけでしかなかった。

「——了解、”中尉殿”。……仕事はこなしますよ、全力でね。だ

が、あの……お人形遊びみたいな”システム”——あんたの”玩具”の為じゃない。その実験台^{モルモット}に、俺を利用しようとするあんたの為でもない。俺だけの為に、俺にしかやれないことをやる、ただだ。——ほら、あの子を迎えに行くんだろ？ 多分迷ってるんだ。余り怒ってやるなよ」

睨み合いと、緊迫した空気に嫌気が挿したのか、それだけ言い終えると、足早に香住は自動扉の向こうに消えていった。

カタカタと、コンピュータが自動でデータを処理する音のみが響く四角い部屋に、孝司は一人残された。

「お人形遊び、ね……」

彼は……香住智哉は、これから長い付き合いになるであろう次世代機、『S-RDPシリーズ』<スペリオル>を——正確には、そのシステムを嫌悪している。それが唯一にして最大の『S-RDP』の欠陥だ。

そしてその理由には、大体的見当はついていていた。彼にとって、あのシステムは……。

「お前にとっては、やはり屈辱か……」

だが、だとしても、立ち止まるつもりなどない。理由は違ったとしても、彼が”この道”に全てを賭けるのと同じように、孝司も全てを<スペリオル>に賭けているのだから。他人の屈辱など、幾らでも踏み台にしてみせる。もし彼が、自分の立場だったとしても、必ずそうするだろう。

「……まあ、それは置いとくとしてだな。”あいつ”は何やってんだ！？ 遅いってレベルじゃないだろ、これ！！」

と、丁度その時だ。一人叫んだ瞬間、狙い済ましていたかのように、ポケットの中の携帯電話が激しく振動した。慌ててそれを取り出し、二つ折りの携帯を素早く展開する。

着信：瀬川水葉——

「……やつと連絡してくれたか。のろま女め」

さて、どう叱ってやるうか、どんな嫌味を言っでやるうか——呆れ、怒りながら電話に出た。

「おい、絶対に遅れるなとあれ程——」

『大変なんです！！ 車に、トラックに撥ねられて……！！』

「——え」

思い切り怒鳴りつけようと電話に出たのだが……。

撥ねられた？ 交通事故？

幾つかのキーワードが一瞬にして脳内を錯綜する。そして他の情報を淘汰し、葬り去り、一挙に思考を制圧してしまった。

事故、交通事故は、トラックは、マズイ。……ヤバイ。

「事故、だと？ はあ！？ き、きつ、けつ、君は怪我、怪我してないんか！？」

あ、やばい、喋り方に地が出た——

修正しようとしても追いつかず、妙にちぐはぐな言語が紡ぎ出されていく。

（まずいな……クールなイメージが台無しだ）

孝司は深呼吸を繰り返し、取り敢えず口調を調節する。だが、そうやって深呼吸している間にも、携帯電話から漏れる少女の悲壮な息遣いが、孝司の意識を乱し続ける。

『孝司さん、落ち着いて！ あの、早く病院に運ばないと……！ 何せ直撃ですから！』

「——落ち着いた。落ち着いていた。ちょっと待て、3秒考える……」

直撃、トラックが直撃……それはまずい。酷い状態なのか。惨い状態なのか！？

孝司の脳内で、物理学的に考えられる限りのスプラッターな状況が、次々と脳内再生される。

「分かった……状況を把握したぞ。こんな田舎の病院じゃ駄目だな。すぐ医療スタッフに連絡を入れる。並の医者より腕は立つはず……で、場所は何処だ？」

『えっと、秋桜学園しゅうおうがくえんから一番近くにある文房具屋さんの——』

「よし、分かった。いいか、安静に……そこを動くなよ。迎えに行く」

『はい！ 待ってます！』

電話を切り、孝司は駆け出した。

#

「起きて……起きて下さい！ 死なないで！！」

瀬川水葉は必死で自転車の男に呼び掛けていた。

バラバラになった自転車とは対照的に、男の方は一見損傷がないように見える。

だが、あれだけの速度で走っていたトラックに、正面から撥ねられたのだ。無事で済むはずがない。

「お願いだから、死なないで……」

諦めきれない。目の前の命を、諦めることは絶対に出来ない。

だが、水葉は無力だ。無力な自分を責める。何も、出来ないのか？ 何も出来ずに、”また”誰かが死んでしまふ、それを何もせず……ただ見ていることしか出来ないのか。

『まったく……どうしてこんな事に……なってしまったのかな……。』

——って、うわ、ひでえええ！ 自転車の壊れ方ひでええええ！』

そうだ。何故、彼は死んだのだ？ 彼はただ、ここを通りかかっ

ただけなのに。

（私が、あんな軽率な行動さえしなければ……）

軽率だった。愚行だった。出来もしないのに、その場の感情に任せて飛び出し、拳句他人に助けを求め、死者まで出してしまった。

自責の涙が溢れた。泣いてる場合じゃないのに、抑えることが出来なかった。

（だ、ダメだ、あたし……泣いても何も起きないって、分かっているのに……）

なのに、視界が涙で歪み、何も見えない。涙は止まらない。

『おおお俺の”唯ねえから借りた”自転車！ シルバードチェイサー（仮）！ 何故こんな無惨な姿に！？ 轢かれたのは知ってるけど叫んでみました！ ショックだったから』

「——って」

やけに騒がしい外野の叫びに違和感を感じ、涙を拭ってみる。先ほど、トラックに吹き飛ばされたはずの男性に、声が似ている気がしたからだ。

そして、クリアになった視界に、予想外の光景が映し出された。

「ええっ……」

いまひとつ力の入らない驚きの声を上げながら——それでも、啞然とせざるをえなかった。

だって、視界の歪みを取り払ってみれば、トラックに轢かれて重症を負ったはずの男は既にそこには居なくなっていて……否、少し離れた位置で何事も無かったかのように、自転車に向かって何か叫んでいるのだから。

「大破だよ、大破。ええー、これどうすんの？ 怒られる……かな」
いや、実際必死なのだろう。今度はバラバラになった自転車に話し掛け始めた。

なんだか邪魔をしてはいけないような雰囲気漂ってはいたが、

あの吹っ飛び方で無傷な訳がない。だから、放って置く訳にはいかない。

「——かな？　じゃねえぞ。クソ、こちらギャグの世界の住人じゃないんだぜ……？　嗚呼、命つてのは……儚く、尊いっ！　現実って……惨いのねっ！」

だが男は、今まで水葉が見てきた人間の中でも5本の指には確実に入るであろうテンションの高さで、一人延々と喋り続けている。

とても怪我人には見えない。少なくとも、痛みを感じてるようにはとても見えなかった。

（こ、この人……ギャグの世界の住人か何かでは……？）

いや、もしそうなら素晴らしいことだが、残念ながらそんな世界は存在しないのだ。人間、死ぬ時は死ぬ。まあ、生きていること自体は本当に喜ばしい事ではあるのだが——水葉はどうしても、彼が全くの無傷であることが信じられなかった。

秒が増すごとに湧いてくる疑念を振り払い、水葉は容態を確認しようとして声を掛けた。

「あの、お怪我はないのですか……？」

「くっ、唯ねえのバイセコーは何故死んだ……ぼうやだからですか……！　これがいわゆる若さ故の——」

「あなたの方がどうして……じゃなくて！　あの、聞こえてますかねえ！」

男はバラけた自転車のパーツをせつせと集め、なんとか組み直そうと試みているものの、原型を止めていないパーツが沢山あるようだ。それでも無理矢理捻じ曲げて修復しようとしている。

その、無駄に終わりそうな修復作業に集中する余り、水葉の声にも気付いていない。

「あのう……聞いてくださって……。お怪我はないんですか？」
水葉は必死で呼びかける。だって、大丈夫なはずがない。無傷な訳がない。目の前で、たしかに轢かれたのだ。大怪我のはずだ。そのはずだ。

「……………お怪我はツ！？ 怪我！！ 怪我ですよ！？ ……ケガ
つつってるんですけど！？ ねえってば！！ 人の話を——」
「怪つ我ああ！？」

喉が腫れそうになるまで声を張り上げた辺りで、ようやく彼は水
葉の声に気がついたらしい。

「『あああ』って何ですか……！ ——えと、どこか、痛むところ
は？」

「しいて言うならば、俺の愛馬がバラバラに弾けたことによるプロ
ークンハートですかね。なんて惨い！」

「…………それは本当に申し訳ないです。あの、でも、お身体の方は……？」

「いやあ……………しっかし参ったな……………」

焦りから徐々に苛立ちへと移行していく水葉の心情を他所に、今
度は男の方から口を開いた。質問に答える気は全く無いらしい。

というか、一度は反応してみせた癖に意に介してもいない。

「この自転車、俺のマイバイク……………バイセコー？ まあ、ともかく
とっても怖い唯ねえというボロアパートの管理人さんから借りた
やつなんすよ」

どうやら、彼が乗っていた自転車は借り物で、とても大事な物だ
ったようだ。そして、それを壊してしまった原因は、自分に他なら
ない。途端に、無視され続けたからとはいえ、命の恩人に対し苛立
ちを感じていた自分が情けなくなる。

「あの……………私……………本当に……………」

「いや、良いんだぜ！？ 気にしなくて、全然OKだよ！ でも、
俺……………どうなっちゃうのかな……………」

「でも！ ——……………はい？」

男の顔、そして声色は、ポジティブになったりネガティブになつ
たり、コロコロ変わる。それがどうも掴み所の無い雰囲気醸し出
していた。

「尊くも儚い命を二つ救ったというのに……………俺ってば、アパートに

帰ったら殺されてしまっただろうなあ——ふっ、青い空がぁ……痛いくらいに憎いぜ！」

どこか遠い目で、雲一つない青空を仰ぎながら、男は言った。恐ろしく悲壮感の漂った声だった。そして、何かをやりきったような清々しい表情。

「す、すみませんでした。本当に、ごめんなさい！——でも本当に、本当にありがとうございます。あなたが自転車で……えーつと、その……突っ込んできてくれなかったら——」

「あははは！！ 気にしないでよ！」 まあ、俺は殺されるんだけどね！」

カラカラと笑いながら男は言った。心無しか、発言の前半と後半とで声のトーンが違うのはどうしてだろう。

「いえ！ 本当に、いくらお礼をしても足りない——」

「だぁーからー、気にする必要ないって！」 でも、俺は明日新聞に載るけどね！ 自転車の持ち主に惨殺されるという不本意な形で！」

この男性、先ほどから笑顔が全く崩れていないのは確かなのだが……発言の後半からして実は相当怒っているのではないだろうか。

まあ、それは仕方がない。そもそも私のドジのせいなのだから、助けて貰ってどうこう言える立場ではない。

「なら、その、せめてもの償いに——」

「今から俺と一緒に自転車の持ち主の自宅まで行き、君が身代わりになってくれると！ そういうことだね！ 悪いなあ。いやあ、でも助かるなあ。君は良い人だなあー」

言い終わらない内に、一方的に手を握られ、激しく上下にシェイクされる。

「え……いや、連絡先教えるので弁償しようかと——」

「それも頂き。よし、早速行こう。さあさあ、ほれほれ」

握られた手をぐいぐいと引っ張られる。なんだろう、この状況は。まあ、この自転車の持ち主にきちんと謝って、きちんと弁償する

べきだと思う。助けてくれた人を助け返すのは当然のことだと、父も言っていた。

だが、”どうしても守らなくてはいけない約束”……<スペリオル>の稼動試験に遅れるのはマズイ。孝司さんに迷惑を掛けてしまう。約束したからには守り抜けども、父は言っていた。

「あの、行きたいのは山々なんですけど、実は私、今から約束が……」

きちんと事情を話し、連絡先を教えて貰おう。

そして後日伺いたいと……そう言おうとした、その瞬間だった――悲劇が起きたのは。

爆音が近付いてくる。車のエンジン音だ。ギャリギャリと、狭く曲がり難いカーブを無理矢理走り抜ける度にタイヤが磨り減る音がある。近付いてくる。近付いて……くる！

「本日二度目デベブガツシュツツ――イェァァァー！？」

「え……！？」

そして轢いた。水葉の手を握って、ぶんぶん縦に振っていた男性を、迷いなく轢いた。

（つて、え、嘘！……轢いた！？）

歩道に乗り上げた車は、命の恩人を迷い無く轢き、水葉のほんの数センチ前で停車した。

赤いスポーツカー、トヨタ・アルテツツアは異様なまでの威圧感を放ちながら、そのドアを開け放つ。

「遅くなつてすまない！　だが、もう安心だ！　さあ、乗れ！　好きなだけ、乗るが良いさっ！　ふは、ふははは、ふははははははは……！！」

中から出てきたのは、やたらテンションの高い小宅孝司である。数日前に会った時よりも、相当やつれているようだ。血走った目が、高いテンションとの相乗効果でかなり恐ろしい形相を作り出している。

私の為に、きつと全速力で駆けつけてくれたのだろう。

（ああ、なる程——つまり、あたしのせいだ）

「どうした水葉、……思ったよりも軽傷らしいが……——お？
コレ”は誰？」

孝司は、歩道に倒れている男を爪先で突付きながら尋ねた。キョトンとした顔で、水葉にとっての命の恩人をつま先で突きまくっている。自分が轢いたことにすら気付いていないらしい。

「……うつ、孝司さんは、悪く……ないです……全部、全部、あたしが……あたしが……」

「……何故泣く？ いや、マジ困るんだが……てか、ここでゴロゴロ転がってんの誰ですか？」

水葉が泣き止んだのは、二度も盛大に轢かれた男が「痛てえー」と叫びながら、ゴロゴロと路上で悶えていることに気が付いた時だった。

やはり、男は死ぬどころか傷一つ負っていない——

#

トラックは走る。

「フ、フシュー………」

トラックは走る。止まっではいけない。止まるのは駄目。走らなきゃ駄目。

「フシュー、シュー………あ、ああああづい」

トラックは走る。トラックは走る。トラックは走る。トラックは走る。

「う、う、あづっ……あづあづ、あづい……フ、フシュー……シュ……」
トラックは止まらない。トラックは止まらない。トラックは止まらない。

風が気持ち悪い。全身から吹き出る汗がシートの上で水溜りになっている。

エアコンはつけている。クーラーだ。全開である。なのに、ちっとも汗は止まらない。

暑い。体の内側が、暑い。

「あづ、あづ、……う、うつつ……フ、フシュー」

外に出たい。外に出て新鮮な空気を、風をこの身に受けたい。でも、駄目だ。だって、トラックは――

「ど、どまらない……どまらな……う、あああああづづづづあああ……フシューシュ……」

トラックは走る。トラックは止まらない。

さっきは猫が、そして女の子が飛び出してきた。でも止まらなかった。速度を緩めようとしなかった。

だって、トラックは止まらない。トラックは走りつづける。

「ブ、ジュ、ジュジュジュ……あ、あ、あつづづ……あ――」

トラックは止まらない――そのはずなのに、信号機の色が変わってしまった。

赤信号。赤信号は――

「あ、あか、あかは、あかは、とま、とま……フ、フシュー」

赤は止まる。これ、社会の常識。

でも、トラックは走る。走らなきゃ、走らなきゃ、走らなきゃ……走らなきゃ。

だから早く青になれ。青、青、青、青、青！

「うううあ、あ、あ……あ、お、お……！――」

要注意の黄色。黄色は駄目だ。まだ早い。我慢の色。

そして、ついに、念願の、解放の色。青、青、青。

「あゝおゝおゝ……！」

まだ、あともう少しのところで渡りきれていない人間が居る。
だらしのない学生の集団……運のない——いや、愚かな奴らだ。
交通ルールをちゃんと守れ！

信号は青になったんだぞ？ 歩行者の信号は……ほら、見る！
よく見る！ 赤だ！

つまり、歩行者の時代は終わった！ トラック発進！
「ヴオオオオアアア！」

溜まったフラストレーションが一気に解放される。

もう止まる必要はない。トラックは、走る！ トラックは止まらない！

ゴシヤリと、鈍くも激しい音がした——

赤い液体が、フロントガラスをべっとりと覆う。

すぐにワイパーで拭き取ろうとするが、中々拭い切れない。ベタベタと纏わりつくそれは、”安全第一”をモットーとしている自分にとって、不快極まりないものだった。

まあ、それでも構わない。

爪先から頭頂部に掛けてじんわりと浸透していく、妙な、しかし心地よい優越感と快感。それと比べてしまえば、些細なことに思えてくる。

この感覚は、癖になる——そんなことを考えながら、もう一度、深くアクセルを踏み込んだ。

トラックは、走る。

第1話（1）：トラックは走る（後書き）

色々と立て込んでいたのと、まだ執筆作業そのものに慣れていないせいか、前の話との間隔が空いてしまいました。申し訳ありません。自分で読み返していても「粗」が結構な頻度で見つかる程につたない文章力しかない私ですが、是非ぶつたぎっていただけると有り難い。

感想、誤字脱字の指摘等、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2661d/>

ワースト・ファウスト・ストーリー

2010年10月21日21時36分発行